矢澤洋爾の Photo Essay

７：本物

プノンペンで売られている毛染め。

日本製との事

某民放テレビ局の「島根の弁護士」というドラマを見た。宍道湖や松江市街など故郷の風景を見ると心が和む。ただ、残念だったのは登場人物の話す出雲弁が本物ではなかったことだ。音の抑揚やアクセントの違い、イとウの中間のあいまい母音がない、など気になるところが沢山あった。ドラマなのだから、本物の出雲弁を紹介する事でなく、出雲地方のテイスト・風味を加える事が目的なのだろう。例えると果汁３％のジュースとでも言えようか。もっとも果汁１００％にしたら全国の視聴者の理解を得るために画面の下に字幕が必要、ということにもなったのかも知れないが。

本物の言葉を話すのは大変に難しい。以下は昔アメリカで経験をしたことである。

大変に流暢な日本語を話す若者と知り合った。２０歳そこそこ、おそらく一生懸命勉強したのだろう、彼の話す日本語は大変達者なのだが、でもどこか生きた本物の日本語とは違う。何か教科書に書いてある文章をそのまま読んでいるような、そんな感じがするのである。機械的な、中性の感じとでも言おうか。

ある時、「日本では男性と女性とで別々の言葉を話していると聞いたが本当か？」と質問されて謎が解けた。彼の話す日本語は性別がないのである。

教科書風の「これは本です。」はいわばショーケースに入った剥製の日本語だ。実生活でそういう言葉が使われる事は少なく、男性なら「これは本だぜ。」と言ったり、女性なら「これは本よ。」と言ったりする。生きた日本語には性別がある。それが外国人が話す日本語にはない。

本物を身につけるには頭で勉強するだけでは無理だ。時間を掛けて全身で生活を体験しなければ本物にはならない。言葉だけではない、おそらく趣味や風格・人格も同じであるに違いない。

（2007.10.9）